

専念寺通信

一月号 (NO. 125)

<http://sennenji.s296.xrea.com/>

明けましておめでとうございます。みなさまお変わりなく、新しい年を迎えられたことと思います。きびしい寒さが日本列島をおおっています。

みなさまの故郷は大雪でしょうか。ことし最初の『専念寺通信』をお届けします。



☆法然上人のことば

もし衆生ありて、かのくににうまれんと願ずるものは、三種の心を起してすなわち往生すべし。一には至誠心、二には深心、三には廻向発願心也。三心を具するものは、かならずかのくにに生まるといへり。

『浄土宗略抄』

『浄土宗略抄』のなかの、法然上人の言葉をご紹介します。「かのくににうまれんと願ずるもの」は、いくつかのところがまえを持たねばならないと説いています。まず、至誠心は「しじょうしん」、深心は「じんしん」、廻向発願心は「えこうほつがんしん」とそれぞれ読みます。身をもって阿弥陀仏を礼拝し、口で阿弥陀仏をとなえ、心でひたすら阿弥陀仏や浄土に思いをこらし、忘れないことを「至誠心」と呼びます。また、「深心」は、文字通り、深く信ずる心をいいます。みずからが煩惱に満ちた存在であり、すぐれた報いをうけるような善もあまり積んでい

ない、物と欲と心の三つの世界（三界）を迷っている人間であることを自覚し、このような身でありながらも、たとえ、一声でも十声でもよい、名号をとなえれば仏は必ず救ってくださるとの、少しの疑いもない心を持つことをさします。「廻向発願心」とは、自分がなしてきたすべての善をふり向けて、浄土に往生したいと願う心をいいます。

難しい仏典を読まずとも、寝食を忘れて修行せずとも、迷いながらも自分のしごとをこつこつと行ない、ただただ、心から信じ、念ずればよい、と、そのような大意が読み取れます。

この言葉をよむと、学問をおさめる機会のない人たち、そして煩惱をふりはらうことのできない人たち、すべての弱い立場の人を救おうとする法然上人の思いが伝わって来ます。上人自身が幼い頃からたいへんな読書家で、また智慧に優れた人であったこと、長くきびしい修行を生涯にわたって実践した人だったことを考えるとき、この短い言葉は、私たちの心に静かにやさしくしみわたる気がします。謙虚でありながら、何かを深く信ずる心を必ず持ち続ける、と置きかえれば、どのような民族にも、どのような時代でも、国でも通じる教えであるといえます。

☆ 銀杏と兎 今年の秋は2本のいちょうがたくさん銀杏を落としてくれました。銀杏3個入りのお守りを150袋作りしました。そして干支の兎を「難民を考える会」から50個いただきましたが、これは12月30日ですべて皆さまのお手元に行ってしまいました。新年にお守りと一緒に兎をお渡しするつもりが数がたりず、7日に追加が届きます。どうぞお参りの折りに干支の兎をお持ち下さい。今年が皆さまにとって良い年になりますように。

平成23年1月1日
大黒

